

(体育科)

「運動を楽しむ中で自ら学び続ける子どもを育む」

(第3年次)

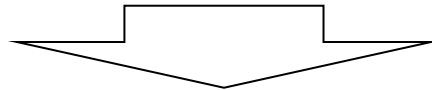
—主体的に学び合うための教師の働きかけ—

大阪市立安立小学校 中村雄紀

## 1. 主題設定の理由

### (1) めざす子ども像

- **考える子** ・進んで問題を発見し、それに向かって深く考えていこうとする自発的な構えを持った子どもの育成。
- **やさしい子** ・人と力を合わせて考え、人と共に創造することに喜びを感じ、人間関係を豊かにする中で、相互に高め合うことのできる子どもの育成。
- **がんばる子** ・自己の目標を達成するために、最後までやり通す気力や、ねばり強い態度を身につけた子どもの育成。



# 自ら学び続ける子ども (主体的に学び合う子)

### (2) 研究主題について

子どもが適切な課題を持ち、主体的に解決に向かうためには、子どもがその学習内容とどのように出会い、いかに興味を持つかが大切であると考えます。これまで実践されてきた授業では、限られた時数や時間の中で効率よく「技能」を子どもたちに身に付けさせようと、単元の導入段階で「よい動き」や「理想的な動き」が示されることが多かった。果たして、このような学習の流れにおいて、子どもが運動と向き合い、課題をつかんで深く探究することが可能であろうか。もちろん、子どもが「よい動き」と「自分の動き」を自他で確認し、比較することによって、「思考・判断・表現」する力をつける機会にしたいという指導者の意図も見受けられる。これも「課題探究」ではなくてはならない学習活動であろう。しかし、子どもが「運動の楽しさに触れたり、『できる』感覚(コツ)をつかんだりする」ためには、「試行錯誤」しながら体を動かす場面を確保し、その中でよい動きや自分の「つまずき(課題)」に気付くことが最も重要であると考えます。

本研究では、子どもが運動と向き合う中で、よい動きが「できた」感じや「つまずき」の中でうまくいかなかった感じが「わかる・できる」こと等を「楽しさ」とした。また、それによって課題意識をもち、自ら課題を設定し解決しようとする主体的な態度を「自ら学び続ける子ども」の姿とした。

## 2. 研究の概要

### (1) 研究仮説

上記のことを踏まえ、本研究の研究仮説を

課題探究学習において、「試行錯誤」から得られた子どもの「つまずき」を教師が見取り、学習活動の中心にすることによって、子どもたちの課題意識は醸成され、自らの課題を探究し解決する力を育むことができる。

とした。

### (2) 研究の内容

この仮説検証のために、

①運動の技能をもう一度洗い直し、習得すべき技能を明らかにし教師が「見取る」技能を把握する「試行錯誤」や「つまずき」は、子どもがその主体となるため、学習の流れを指導者が的確にコントロールしていく必要がある。ともすれば、学習の内容的にも時間的にも大きなブレやズレが生じてしまいやすいからである。よって、指導者は、その学習で身に付けさせるべき技能を明確にしたり、子どもたちに考えさせることと、教師が指導することを区別したりする必要がある。

②「試行錯誤」が深まるように、子どもの「つまずき」や思考の流れに沿った指導計画を構築する。本研究では、習得すべき技能が、子どもにとって「身に付けたい技能」となるように、学習の流れを工夫する。子どもが、指導者からよい動き＝習得すべき技能として提示されて身に付けていくのではなく、子どもの欲求やつまずきの中から、目標達成のための具体的な技能に気付き、身に付ける必要性を感じられるようにしたい。この欲求やつまずきから生まれる必要感が「試行錯誤」や「課題意識」につながると考える。

## 3. 本年度の成果

- ・本年度は、指導計画を作成する段階から子どもの「つまずき」を予想し、各授業時間に教師が「何を考えさせ」、「何を指導するか」を明確に把握していたことで、子どもたちの課題探究活動が単元終了まで意欲的に進んだ。
- ・教師が「つまずき」とそれを「解決している」子どもを見取り、両者の気付きを交流させることで、必要感のある課題となり、主体的に学び合う姿が多く見られた。
- ・各学年の形勢的評価から、従来型の教師主導の授業よりも、今回取り組んだ、子どもの「つまずき」を中心の課題にした授業が、より達成感を味わうことができ、技能習得にも つながりやすいと考える。

## 4. 本年度の課題

- ・子どもの「つまずき」を予想した指導計画は、主体的な学びの手立てとして有効であったが、授業の中でそれぞれを「見取り」交流させグループや全体に広げるといったことに難しさを感じる教師が多かった。